

優秀修士論文概要

小島信夫と「病」

島田 拓

小島信夫『別れる理由』は、一九六八年十月から一九八一年三月まで、十二年半にわたって雑誌「群像」に連載された。四〇〇字詰め原稿用紙換算で約四〇〇〇枚。思わずぎょっとしてしまう長さだが、その内容も並大抵ではない。はじめのうちは、小島の過去作『抱擁家族』と重なる登場人物たちが、主人公の前田永造を中心にリビングルームでひたすら会話を続けている。話題はあちこちに逸れ、時間や空間を自在に行き来しながら、やりとりが重ねられていく。するといつのまにか、永造は女になったり馬になったりして、ふしぎな舞台のうえで縦横無尽に語りつくすことになり、ついには作者までもが登場する。その後、永造は彼とともに出版社のパーティーに出席し、実在の作家たちと文学的な議論を展開していく。

この奇妙さはいったいなんなのか。どこからやってきて、どのように広がっていくのか。以上の問いを起点とし、本論文では、小島信夫作品における「病」に注目した。なぜなら『別れる理由』から突然、この奇妙さが顔を見せるようになったわけではないからだ。それは同様の違和感をふりまく「病」としてすでに登場していたし、その後もつきまとい続けた。文学と病気がそもそも結託しているにせよ、小島信夫の描く「病」は、彼独自の手つきによって、さらなる射程を獲得していくものだった。

たとえば『吃音学院』（一九五三年）では、吃音が「病」として特徴的

に描かれている。本作は、主人公の衣川が吃音を矯正するため、K吃音学院という施設に入学するところから始まる。しかし授業で教えられる発声方法は、「間の抜けた声」⁽¹⁾を響かせ、年下の子どもにバカにされる原因になる。一方、同じ学院に通う営業マンの諸留五兵衛は、「はげしい吃りの連発」をくり出し、相手の「純真な気持ちに衝撃をあたえ」⁽²⁾ることで契約の取り決めに成功する。

『抱擁家族』（一九六五年）においても、事態は変わらない。本作では、大学の講師である俊介を父とする一家が崩れていく様が描かれるのだが、そこに横たわっているのがガンという「病」だ。乳ガンになる妻、時子との関係を改善しようとする俊介の企ては失敗に終わり、逆に症状の進行が夫婦仲を良好にしようとする。自分の両腕で自分を羽交い締めにするように、あるいは抱きしめるようにして、その身にまわりつく。治療と症状といった二項対立の線引きをあざ笑う「病」を、小島信夫は描いてきたのである。

この「病」の性質を踏まえ、『別れる理由』についての先行する論を整理してみると、興味深いことが見えてくる。おおまかな評価として、否定派、肯定派、両義派に論は別れるのだが、両義派の考察が「病」に類似しているのだ。たとえば三浦雅士と柄谷行人はともに、本作における内と外という概念の逆説、そしてそこから生じる、「自分であって自分ではない」⁽³⁾自分や「決定不可能な」世界」⁽⁴⁾について述べている。

しかし同時に、『別れる理由』における「病」を注意深く観察していくと、両義派の考察、および『吃音学院』や『抱擁家族』で見られるそれには留まらない、新たな一面が浮かびあがってくる。その端緒となるのが、先行する論に共通する認識と小島自身の認識のズレだ。派閥を問わず先行する論では、第一部、第二部、第三部といった具合で本作を三分割して読解に取りかかる。だが作者である小島自身は、そうした分割を否定するような

ことを口にしてゐるのだ。

なぜこのようなことが起きているのだろうか。本作においても、冒頭から前作と同様の「病」を確認することはできる。しかし読み進めていくうちに、「病気には勝てない」⁽⁵⁾と、どこか一方的、一元的なおびが「病」から漂いはじめる。さらに「作者」の「私」が登場して記述が混線してくると、実在の人物らしき人物の口から、『別れる理由』は思えば、病気の小説である⁽⁶⁾といった一節まで飛び出すことになる。

また、『別れる理由』を取り巻く物理的な環境に目を向けると、本作には明確な始点も終点もないことがわかる。坪内祐三が指摘するとおり、本作の始点はそもそも連作短編の延長線上にあり、その終点も現実の小島信夫と森敦の対談に流れ込んでしまっているからだ。

このとき、二項対立の線引きはひとつの閉じた領域があつてこそ成り立つのだと気づかされるだろう。作中では二項対立とその矛盾をじつさいの病気を通じて描きながら、同時に破綻寸前の自己言及をし、そこから作品という物理的に不完全な閉域を紙面に畳み込む。『別れる理由』における「病」は宙返りをするかのように、三半規管のゆるやかなまどいとともに病気に着地するのだ。

ここで、批評家、研究者たちと小島自身の認識の齟齬について、ひとまずの解を述べるができる。それは、『別れる理由』がそこにある数冊にまともまつていると見るか、否かの違いである。しかしながら、この解法自体が二項対立に巻き込まれているとも言えるだろう。「病」を取りこぼさないためには、さらに別の角度からの検討が必要になる。

後年、小島は『別れる理由』について、「三回目を書いたとたんに、この小説は大失敗したと思つてしまつた」と回想し、そのことを「小説の外部からではなく、内部から宣言しようとした」⁽⁷⁾のだと書き記している。この失敗が、「病」をあきらかにするための手がかりになる。というのも、

小島の言う三回目にあたる作品、「二度の訪問」には奇妙な推敲がほどこされているからだ。

あらすじとしては、男が、二人目の妻、三人目の妻を迎えようとするときに、どうか籍を抜いてくれないかと一人目の妻のもとへ交渉しに行くというだけの話である。しかし本作のラストには、初出時から単行本に掲載されるとき、「この世界は、限度へきた」「世界をこわした元兇の、一片をはきだした」⁽⁸⁾と、なかば元の文に負荷をかけるようにして言葉が追加されている。ここに「病」が意識されていることは明白だろう。つまり小島の言う失敗とは、「病」をうまく書けなかったということである。

では、その失敗を「内部から宣言しようとした」というのはどういうことか。この一節は、小島と親しかつた森敦の議論を下敷きにしている。『意味の変容』のなかで森は、「内部」に関して「境界」や「密蔽」という言葉を軸に独特の理論を構築している。その要点について小島は、「密蔽は開放だ」と評して寄り添いつつ、自分は「フレームを作る、額縁に入れる」⁽⁹⁾ということをや昔から否定しようとしてきたのだとつけ加える。

小島の口ぶりからは、『別れる理由』という作品において、森と同じ地点を指しながら、別の経路を想定していたことがうかがえるだろう。それがもつとも明確に表れるのが、本作のタイトルをめぐる二人のやりとりである。小島は、当初考えていた「別れられぬ理由」というタイトルを、森からの提案で「別れる理由」に変更したことに触れ、「この小説の長さは、一つには、『別れられぬ理由』がどうしたら『別れる理由』に近づくことができるのか、のほどかしい足取りのせい」⁽¹⁰⁾だと言う。

「別れられぬ」という言葉の輪郭のはやけた響き、そして「小説の長さ」という時間的な把握。森の「境界」を重視する空間的な整理とは異なるその姿勢こそ、小島が『別れる理由』として示したものにはかならない。「密蔽は開放だ」と言わなくとも、小説において、その「密蔽」が完成されて

いく過程を延長していけば、「フレーム」や「額縁」に抗うことができ
しまうのである。

このあけすけな戦略は、のちに小島自身から「内部」という言葉を引き
出してしまふと同時に、『別れる理由』における、今、現在というものへ
の強いこだわりを生み出すことになる。始点も終点もあやふやなまま十二
年半続いた連載も、矛盾をリニアにほぐす否定の語尾も、節々からにじみ
出す書くことと語ることの二重性も、すべては現在を中心に連なり、どう
しようもない違和感として読み手にまわりつくのだ。

あらためてふり返ってみれば、「病」は現在にしか存在しないと
言えるだろう。逆説を唱えても、推敲をしても、批評をしても、現在を断ち切っ
たうえで事後的な処理をしているかぎり、「病」は十分に捉えられない。
現在を引き延ばし、「病」がうまく書けないということを書いていく。そ
うすることによつてのみ「病」は現れる。だからこそ小島信夫は、『別
れる理由』以降の作品についても、その以降という区分を疑うように、ひた
すら書き続けたのである。

注

- (1) 小島信夫『吃音学院』『殉教・微笑』講談社、一九九三年、四五―四六頁。
- (2) 同上、五一頁。
- (3) 三浦雅士『事件の経緯』『メランコリーの水脈』福武書店、一九八九年、
一九三頁。
- (4) 柄谷行人『小島信夫論』『隠喩としての建築』講談社、一九八九年、二一
〇―二二頁。
- (5) 小島信夫『別れる理由3』小学館、二〇一九年、一一―一二頁。
- (6) 小島信夫『別れる理由6』小学館、二〇一九年、八一頁。
- (7) 小島信夫『チェーホフを読みながら』『小説の楽しみ』水声社、二〇〇七年、

四四―四五頁。

- (8) 小島信夫『二度の訪問』『小島信夫短篇集成 第⑥巻 ハッピーネス／女た
ち』水声社、二〇一五年、一四七ページ、傍点は引用者、推敲箇所を示す。
- (9) 小島、前掲『小説の楽しみ』四五頁。
- (10) 小島、前掲『別れる理由6』四四八頁。